



札幌・コーチャンフォー新川通り店における海原純子ジャズ・ライブのステージ。ピアニストは岩井優也

## 長く生きることによって表現に深みやスパイスを加えられるようにすることがアート

「長く生きることによって表現に深みやスパイスみたいなもの加えられるようにすることがアートには必要ですね。いつまでも小娘ではいられないし、いてはいけない。ジャズのスタンダードの歌詞から読みとく主人公は多様性があるんですね。」

紫乃さんのフォトストーリーに出てくる女性たちの影には男たちが見え隠れする。その存在の影が濃かったり薄くなったりモノトーンだったりするんだけどそれはジャズのスタンダードの女性主人公たちの影に見隠れする男たちとリンクするなあ、と思いながら曲を選んでいました。

S 出ましたね、純子節。「いつまでも小娘ではいられないし、いて

若井優也、海原純子、桜木紫乃の3ショット



はいけない」それ、還暦間近のわたしにはとても沁みます。小娘、っていい表現だなあ。未熟っていうとネガティブな印象だけれども、経験のなさが持っている一瞬の瞬発力であると思うのね。それを「小娘」と表現してくれる海原純子は、やっぱり300歳(笑)。おっしゃるとおり、「彼女たち」に出て来る女性たちは、それぞれの間人間関係で得てきた傷や癒えを、その年齢なりに抱えて生きています。

あの日純子さんの歌声に感じ取った包容力は、本の中の女性たちの心意気だったんですね。

「ところで紫乃さんはサクスを数年前からはじめて今も練習を継続してますね。それはなぜ？なぜ桜木紫乃はジャズを演奏するのか？」

S ジャズ、と言えるほどのものではないですよ。伴奏と一緒に終われば奇跡、くらいのもんです。結婚して子どもも産んで、好きな小説を書いて。欲しいものは常に手に入れてきた気はするんですけど、欲しかったものを一定のかたちで維持することのほうがずっと大変だった気がするんです。いつの間にか小説は、「よく暮らす」ためにめいっぱい頑張ってる私の拠り所になっていました。不思議と書いていけば必ずと答えが出てくるんですね。自分という方程式で解いてゆく人間のあれこれを書いていると、実人生を「よく生きる」ことしか、人間取材というのは出来ないんだと思うようになりました。実生活と虚構の、まさにセッション。登場人物は、私の経験を使って虚構の中で自由に動いてくれます。貧乏所帯で子育てしてきた私の人生が、彼らの役に立っているんです。だから、人生経験のない若い人が書いたものが観念的になってゆくのは仕方ないことと思うの。だって、人生これからの人が書いているんだし。経験が書かせる経験なき1行があるというのはいつも言っていて、私は書くことで登場人物とセッションして、読者は読んでくれることで私とセッションしてくれてるんだと思う

の。  
音符も読めないまま楽器を持ったことは、とても良かったです。世の中ままだらないことがあるって、身に染みるから。これがビュンビュン上達していたら、私の性分だと「仕事」にしくなってしまう。怖いことですよ。いつも(何をやるかわからない)怖い自分と闘っているというのは、純子姐さんと同じだと思っています。」「紫乃さんは本が読者に届きページを開いたときに私のセッションが始まるってましたね。小説は個人に向けたライブなんだと思いました。ジャズと小説の共通点…」

紫乃さんのフォトストーリーにはそれぞれ違う年代の女性たちが葛藤しながら生きていますが最後にすべてを手放した女性が出てくる。手放すと心は解放されますよね。私は最後の女性のイメージで自分のオリジナル曲“Then and now”を合わせました。

## 「自分はなぜジャズを歌うのか」の問いと答え

S ここには、先ほどちらと仰っていた、「自分はなぜジャズを歌うのか」の問いと答えが詰まっていると、私は思ったんです。まさに300歳の海原純子がてんこ盛り。歌詞の解説をさせるのは野暮だけれど、あの日純子姐さんがどんな気持ちで歌っていたのか、会場にいらしたみなさんにもお伝えしたいので、教えていただけませんか。

「私は19歳から25歳まで新宿の店で専属歌手をして生活費を稼いできたんですがテレビドラマの主題歌を歌いレコードをリリースしたらひっそりクラブで歌うことができなくなりました。ちょうど医学部を卒業して研修医を始めたころなので新聞や雑誌の取材を受けて身辺があわだかしくなりやりにくい、なんといってもそういう人はいなかったから、歌手なんかしてチャラチャラしてる暇がよくあるね、という世間の目があるし、患者さんだって女の医者というだけで信用がないのに加えて歌なんてとんでもないですよ。これはとてもできないと思ったのと日本人の自分が英語でジャズを歌うなんて一生やってもできない、自分にはリズム感もないしだめだ、と思いやめたんです。自分を表現するために原稿書いたりテレビで話したり、いろいろしたが、なぜかいつも自分の全部を生きていない気がしていました。やはり自分の中には音楽でしか生きられない部分があるということに気がついて20年以上たってまた音楽に戻ったわけ。

S 時間をかけないと手に入れられないものが、あるということですね。自分の人生に責任を持つって、そういうことなのかも。

「最後に紫乃さんにお聞きしたいのは、小説にはいろいろなジャンルがありますよね。ジャンルもあるし、売れるか売れないか、みたいな。いろんな小説家がいるけど作家に対してどんな気持ちを持ってらっしゃるんですか？というの、先日自分は楽器も演奏するスキャットバリバリのミュージシャンが、「ただ歌詞を歌うだけの歌手はジャズじゃない」と発言するのを見て「えっ!」と思った。「じゃ、ピリー・ホリデイやステシー・ケントはどうなの?」って。自分と違うアプローチの人を否定する雰囲気は日本のジャズ界にはあるけど小説はどうなんですか？」

S 経験を積んで生きてゆくことが人生だとすれば、ひとつの物事が終わって一周、次をクリアして二周目、というのもあると思う



ジャズ・ライブ後に行われた海原・桜木両氏によるトークショーの様子

んですね。二周三周とするなかで手に入れたいのは、やはり「経験」ですね。出会う人たちみんなそれぞれ大小の経験を積んでいるわけで、自分だけが前に進んでいるということはない。

書いているほうは自分がオリジナルだと思っているけれど、書き上がってみればそうではない場合もある。それは自分の方程式で問題を解いていなかった、プロではなかったということで、借り物の物差しでいくら新しいお話を書いても、それはオリジナルではないんですよ。別の経験をしているひとが書くから、小説になる。いつも、これ既に書かれているんじゃないか、という怖さと闘っているのが小説家です。個人的には、方程式の違う人が書いた小説から学ぶことはあれ、否定的な気持ちになることはないです。人に読んでもらう、聴いてもらうという行為の内側には、やはり「独自の解釈を世に問う」という怖い舞台がある。踊りきる胆力、あるいは説得力がないと、プロでは居続けられないですね。答えを出し切ったひとの声や音色は美しいし、文体が出来上がっているひとの文章は美しいと思うんです。

コーチャンフォーは北海道、関東で展開している本、音楽、文具、飲食の大型複合施設。新川通り店はその中でも最大級の規模を誇る

